

物語テキストにおける視線の表現

野村 眞木夫*

(令和2年8月27日受付；令和2年11月26日受理)

要 旨

本稿では、視線の概念を仮定することにより、日本語の物語テキスト（小説）の表現と理解のしくみを、テキストの参加者のたちばから説明すること試みた。その過程で、(1) 関係性と方向性が視線を構成する、(2) 視線に距離を想定できる、(3) 視線が自己言及的に機能することがある、(4) 視線が並列または合成されることがある、(5) 視線が参加者の心の働きを生成する、などを明らかにした。

KEY WORDS

視線 vidlinio 視座 vidpunkto 被視点 objekto 関係 rilato 方向 direkto
並列 paralelo 合成 kunligo 心の働き mensa funkcio

1 問題の所在：テキストにおける視線の仮定

本稿は、現代日本語による物語テキスト、すなわち小説において、糸井通浩(2009)の提案した「視線」の概念を仮定することにより、これまで日本語学、言語学で活用されてきた「視座・被視点（注視点）」の概念とともに、言語表現のしくみをさらに明晰に規定することを目的とする。

糸井は、語り（物語・小説）言語において、視点を表現との関係で考えると、(1)の3つの概念「視座・視線・被視点」が包含されていて、厳密には区別すべきである、と主張する。

(1) 視座とは、認知主体である語り手が事態を認知し表現する位置——どこから見ているかの「どこ」を言う。基本的には語り手は、語り手の「いま・ここ」を視座とする。日本語の語りでは、「いま・ここ」が確定的・固定的ではないことが、視点論の焦点の一つになる。

視線とは、まなざしで、主体の、認知する対象（ものやこと）に対する、主観的な思いである。もって臨む思いもあり、また、対象に接して引き起こされる思いもある。時には、対象に対する評価的判断ともなる。事態認知における、心の作用面を言う。

被視点とは、見られる対象（ものやこと）で、主体が、何を・どこを見ているかが焦点化される、言わば認知における対象面である。客観的な目で捉えられた対象であっても、焦点化されると、対象（ものやこと）の前景化する面や背景化する面が生まれる
(糸井2009: 69)

視線に関して、すでに文法論の立場から、大江三郎(1975)が「視線の軸」という概念を提案している。これは「授受動詞が描写する授受のできごとを、その当事者として内部から主観的に眺める人の位置」（大江1975: 33）と定義されていて、糸井の視座の概念に近似する。大江の論に、視線そのものの定義は認められないが、日本語の授受動詞や敬語の用法に関連して「主観性はある人が他の人を眺める一種の視線」（同: 234）という言いかたがあり、「視線の方向性」（同）、「話し手から聞き手への敬意の視線」（同: 255）、「視線の交錯」（同: 256）「視線の主観的方向性」（同: 276）などが概念化されている。方向性は、「視線の軸よりみた具象的またはひゆ的動きの方向のこと」（同: 240）と規定されている。糸井による視線の定義との整合性が高い。特に方向性の概念を導入したことは重要である。

久野暉(1978)は、大江の仕事と重複を避けることを明記して展開される。談話文法の立場から「視点」をとりあげ、視線への言及はない。

視点の周辺にかかわる諸概念は、佐伯胖(1978)、茂呂雄二(1985)、松木正恵(1992)をはじめとして視座や注視点への言及があった。

視線に明確な定義をもって言及している例は、松木(1993)である。それは「思考の流れにしたがって動かされた視点の軌跡」とされ、たとえば、「P（前提）→（推論）→Q（結論）」が「[視座] → [視線] → [注視点]」に対応する関係として図式化されている。例文には複文から連文がとりあげられるが、議論で焦点化されるのは概言や説明の文末表現であり、松木も文章における視点の問題との関連については課題が残されていると述べている。

最近の研究として、古賀悠太郎(2018)がある。松木の仕事なども参照しながら、授受動詞や移動動詞、ヴォイスを具体例としてとりあげる。視点が中核的な論点である。

榎本美香・伝康晴(2011)は、3人の会話における視線行動を分析し、話者交替との関係を取りあげる優れた論文である。しかし、本稿の目的に直接かかわる仕事ではない。

海外では、Fludernik(2010)が、従来の物語論の立場で視点や焦点化の問題を取りあげ、認知科学の領域の仕事としてDancygier(2012)は、story-viewpoint space、および入れ子構造をなすmain narrative spaceとnarrative spaceの間に結合関係や距離を想定したモデルを構築している。しかし、糸井の提案する視線に相当する概念は、認めにくい。

本稿では、視線の概念は基本的に糸井の定義にしたがう。ただ、糸井自身によるその後の言及は、糸井(2014)などで行われているものの、具体的な分析例はない。また、「思い」や「心の作用面」という規定に若干のあいまいさが残る。そこで、これをより具体的に指示する規定として、往住彰文(1991: 10)が、発話を聞いたり小説を読んだりしている者におこっている「音声や文字の認識、意味の理解、意図の推論、感情の体験、行動の決定などをはじめとするさまざまな出来事」を「心の働き」とみなした、その語を採用することとする。糸井のあげる評価的判断もここに包括されるものと考え。なお、糸井(2014)では、「被視点」を「注視点」とも言い換えているが、本稿では、被視点を用いる。以上により、視線は、次のように定義することとする。

- (2) 視線とは、視座から被視点への方向を有する関係であり、主体の心の働き、すなわち対象の認識、意味の理解、推論、感情・感覚、意思決定、判断、評価などを生成する。

野村眞木夫(2018)では、糸井やDancygierの仕事を参照しながら、物語テキストに視線の概念を導入すること、視線が合成されること、および語り手と対象またはテキストの参加者（作中人物）相互の間に認識的または認知的な距離の概念を導入することを仮定した。しかし、糸井の提案にある「主観的な思い」の具体に踏み込むにはいたらず、また「対象に対する評価的判断」、 「事態認知における心の作用面」などの概念も、総称表現との関連で言及したにとどまり、具体的な検討にはおよんでいない。

次に、視線の概念の仮定が、物語テキストの表現において有効であり、テキストの表現のしくみのなかでどのように視線の手がかりをうることができるのかについて、具体的な表現にそくして検討する。(3)は、物語（小説）の部分テキストであり、語句「視線」が用いられている。1977年12月26日から2週間、波子の滞在している、スイスとの国境に近いフランスの修道院でのエピソードである¹⁾。

- (3) ①斜面に面して立っている波子の後ろを、時折、散歩する人の足音がひそやかに過ぎていく。②斜面の下の道にも散歩する人がちらほら見える。③昨夜懐中電灯の切れたのはあのあたりなのだ。
④ふと、後方に目をやると、樹氷となった枯木ばかりが立っている山の一割から、深い積雪を踏んで出てくる、立派な体格の男が見え、波子は直観で、あの男だと思った。⑤自分よりすこし年長にみえる。
⑥迎えるふうに波子が見ていたからか、その男は近づいてくる。⑦波子の視線の上を歩いてくるかのようだ。
⑧自分が微笑している。⑨いや、自分のなかに、巨きな透きとおる花のような微笑がたったいま開花したのがわかった。
⑩「どこの国ですか」
⑪ 彼は言った。
⑫「日本です」
⑬ 波子は言った。

(高橋たか子『装いせよ、わが魂よ』新潮社: 296)

語句「視線」は、文⑦に使用されている。この部分テキスト(3)は、テキストの中心的な参加者である波子の視覚の対象または視覚の働きが表現の中核をなす。

ダイクシスの中心 (deictic center) は、「てくる」の使用により波子であると判定できる。テキストの現実世界 (textual actual world) (Ryan 1991: 24) における現在を t_0 として、〈主体または対象, 時間, 場所〉からなる参照点

の組によってこれを記述すると、〈波子, t_i , 斜面上〉のようになる (cf. Löbner 1976: S. 89, K. 7)。これが視座である。④における被視点としての対象は、同様に、〈男, t_i , 波子の後方〉のように記述できる。文⑦で言及される視線の関係は、視座の波子が被視点の男の方向を見ることで成立する。

(3)で使用されている動詞類は「見える」「見る」および「目をやる」が視覚情報に関係する。「(年長に) みえる」は視覚を媒介する判断である。これらを『分類語彙表-増補改訂版』に照合すると、「見る(2. 3091)」に分類される。「視線」は「見る(1. 3091)」であり、類は異なるが分類項目が一致する。この視線に関して生成される心の働きの表現として「思う」「わかる」や「直観」をあわせて照合すると、これらは、中項目の水準で「人間活動-精神および行為-心(. 30)」に分類される²⁾。「微笑(する)」もこれに分類される。この項目の意味的範疇は、糸井が視線に認めた主観的な思い、心の作用面、および往住の心の働きと整合する。

(3)は、テキストの参加者の移動と、他の参加者による観察の関係が表現されていて、そこに視線の方向が認められる。この関係と方向が視線を構成する。(3)の視線は、上に述べたように、視座が〈波子, t_i , 斜面上〉、被視点が〈男, t_i , 波子の後方〉である。また、⑥の「近づいてくる」によって、視線の両端に想定される波子と男の距離は変化していることが明示されている。その変化は、文④で「見える」程度であったものから、⑩以下で対話を可能とする距離までの接近であり、その軸に厳密な尺度は想定できない。

この距離について、野村(2018)では次のように定義されており、上記の表現はこの定義にかなう。

(4) 距離とは、語り手がある作中人物または表現対象に対して想定する、あるいは語り手が複数の作中人物または表現対象の間に想定する認識的または認知的な位置関係である。

本節では、物語テキストにおいて視線を仮定し、視座としてダイクシスの中心を規定することで視線の関係と方向を認定し、視線の両端である視座と被視点の間に距離を想定することが可能であることを例示してきた。以下、視線とその周辺の諸概念を活用することで、言語表現のどのような事象を記述することができるのか、具体的に検討する。

2 物語テキストにおける視線の合成と距離

本節では、被視点の時間的な属性と距離の差異が、視線における主観的な思いの構築にどのように作用するのか、また視線の合成がどのような様相でなされるのかを考察する。とりあげる部分テキストは、時間的な差異のある複数の被視点が認められる例である。

(5) [引用者注：コバヤシは、フランドル地方のサンヴナン精神病院に赴任すべく、同僚の運転する自動車でその地に向かっている]

ひょっと、広場から何かが逃げていき、物悲しい気分がたゆとうた。時を告げるチャイムであった。夕日に赤々と照らされた鐘楼の尖頭の文字盤で六時の針が光っていた。

ベツチュンヌの丘を下ると、その先はフランドルの低地である。その後何回となく往復するはずの、サンヴナンまで曲折していくこの道を、コバヤシは好奇心と不安と疲労の混った目で眺めた。いくつかの部落を過ぎ、運送船の漂う運河を越え、田園と牧場と森の間を縫って行くこの道。それは、道端の小川に黙念と釣糸を垂れている老人や、雑草で脹らんだ袋を背負った老婆の印象とともに、そこで昔からいとなまれてきた未知の時間と生活を、コバヤシに差出していた。そう、そこには、夕日に暖められている赤黒い沼地が横たわっているのだ。その水底には、静かに不気味に醗酵している見えない生物たちがうごめいている。そして、この印象は、サンヴナンのちっぽけな村や、精神病院の赤い建物の最初の遠望と固く結びついていった。

(加賀乙彦『フランドルの冬』小学館: 178f)

(6) [引用者注：(5)の約1ヶ月後の休日、コバヤシは同僚のクルトンとサンヴナンの村を歩いている]

「だとしたら……」そう言いかけて、コバヤシは牧場が終り、サンヴナンの村の裏側が、うずくまった猫のような教会堂の後陣が、ゆっくりと近付いて来るのを眺めた。村の墓地、あの七百年もの間、整然と繁殖してきた墓石の集団、そのまざまざとした情景が不意に彼の脳裡に浮び上ってきた。それは、この土地にきた最初の日、夕日に映えた村や病院を見たとき覚えた、あの青黒い沼地の底で醗酵しては消えていく微生物の感覚に直接つながっていた。この世には二種類の人間がいる。墓地や沼地を作るために存在し、静かに消えていく人と、それら

から、はじきだされて存在しながら、しかも墓地や沼地と関係を絶つことの出来ない人、それらから目をそむけることが不可能な人と。例によってコバヤシは、その事を了解しただけで、考えてはいなかった。彼はただ、《われわれの世界にいる人》と《彼らの世界にいる人》の区別を漠然と感じたままである。コバヤシは、われわれの世界にいた。そして、おそらくはクルトンも。それから……そう……ドロマールも。(同：287)

(5)と(6)には、コバヤシがサンヴナンまでの道やその村で「眺めた」対象と、そこで生成された印象や思考内容が記述されている。(6)の「この土地にきた最初の日」とは、(5)の日を指示する。移動手段は自動車と徒歩で異なるが、ともに視座はコバヤシである。被視点として2つの部分テキストに共通する見られる対象は、サンヴナンの村や周辺の人たち、建造物などの景観である。ここに視線を仮定できる。そこから印象あるいは感覚として生成されるのは、それぞれ、「夕日に暖められている赤黒い沼地」と「あの青黒い沼地」、およびその水底の生物・微生物として記述される表象である。若干の表現の差異が認められるが、類似する対象を観察しているものと解釈される。

部分テキスト(5)の現実世界の時間(t_1 とする)から約1ヶ月を経過した(6)の現実世界の時間(t_2 とする)の記述は、(6)の後半でコバヤシによる人間の了解に直結する。すなわち、2つのテキストに想定される視線は、 t_1 から t_2 にいたる時間の経過により、過去を対象化することと、病院に着任してからの同僚を介在させることで、了解される事項と対象の価値を増幅させる。つまり、(6)で、被視点は、サンヴナンの村の裏側や教会堂の後陣のみならず、約1ヶ月前のサンヴナンの遠望に対する自省作用の働きにより、(5)の多様な対象もふたたび被視点として機能する。

このことから、(6)の時間 t_2 におけるコバヤシを視座とする視線には、まず、 t_1 における村の裏側、教会堂の後陣や墓地を被視点としてこれを認知する視線がある。また、約1ヶ月前の時間 t_1 のサンヴナンの村や精神病院の赤い建物を被視点とする視線とこれを t_2 において想起して認知する視線が合成された新たな視線が想定される。

対象との現実的な距離については、(5)では遠望とあり、(6)ではサンヴナンの村のなかを歩いていることから、両者に遠近のちがいが認められる。そのちがいは、視線を仮定することで、そこに想定される認知的な距離によって説明できる。この距離の差異は、印象を中核として記述されている(5)に対して、(6)においては了解に言及される差異のあることと整合する。 t_2 における視線は、 t_1 における被視点を介在させることで、印象や感覚が増幅し、二種類の人間に対する了解の表現にいたったと理解することができるのである。

上の例に見る人間の了解は、視座である対象と異なる人間を対象とするものであったが、自分自身を対象とするばあいがある。(7)は、コバヤシが自動車の運転を誤り、凍結した下り坂の道路を滑走している過程の描出である。

(7) ①彼は怖かった。②が、あがいてもどうにもならぬと自覚したとき、彼は圧倒的な権力者である死に屈服し身をゆだねたのである。③彼は《死の側から》自分を見た。④自分の肉体が一個の落下物として完全に受動的な滑稽な状態にあることを理解した。(同：488)

(7)では、①②に感情と状況の自覚が記述されている。③に「彼は……自分を見た」とあり、視座と被視点は同一の主体・対象であり、時間、場所も同一である。このときの視線は、自己言及的に回帰して機能していると考えられる。その視覚行為の表現は、比喩的な属性を有し、④の理解行為に展開している。

3 物語テキストにおける視線の並列と合成

本節では、視座としてのテキストの参加者が複数認められる例をとりあげて、特に視線が並列されたり合成されたりする様相を考察する。

(8)は、(3)と同じテキストである。(3)の4日前のエピソードで、波子が修道院に滞在すべく訪れ、聖堂から宿泊所へ案内される過程である。ここでは波子と修道院の女性の2人がテキストの参加者となっている。

(8) 外へ出る扉を押すと、夜の雪の山がしんと静まりかえっていた。さっき体がぐらついて降りるのに苦労した斜面を上り、道に出て、その女と二人きりで凍える冷気のなかを歩いていく。と、もうおさまってしまったものと思っていたのに、不意に突風が巻きおこる。足もとの雪を、さかさまの滝のように高く高く持ちあげ、それは視野全体に拡大して、大きく激しいものとなり、雪の飛沫が四方八方に散乱しながら体をつつみこんでくる。口や鼻や目のなかにまで入ってき、その女も波子も思わずその動きに熾烈に行き交い、けれども、来た時とは違って、なぜか不安も畏怖もなくて、むしろ、この昇ったり降りたり横からきたりする白い冷たいものに、繰り返し

浄化されているという強く痛く貫く感覚なのであった。(高橋たか子『装いせよ、わが魂よ』: 288)

ダイクシスの中心は、テキストの参加者の2人で、道を歩いて進む方向も同一である。「視野」と記述された周囲の視覚にかかわる状況の記述が誰を視座にしているかは明記されていないが、「その女も波子も思わず」とあって、2人の共有する視座と視線の存在を想定することが可能である。しかし、(8)の部分テキストにおいて、被視点は判然とししない。このことから、(8)に認められる視線は不確定でありえ、2人の参加者の共有する部分とそのうちの1人のみが所有する部分とを想定することが許容される。これまでいた聖堂には独力で歩いてきたことが前段に記述されていることから、「来た時とは違って」以下で記述される感覚は、波子のみにも帰属すると解釈すべきである。

このように理解すると、「思わずその動きに熾烈に行き交い」は、2人の女性たちと吹雪との関係として視線が認定されるが、「なぜか不安も畏怖もなく」以下の記述で認定される視線は、波子と吹雪との関係としてであると考えられる。この心の働きは、テキストの中心的な参加者の波子の感覚として表現されている。

部分テキスト(8)では、2人の参加者の独立した視線が並列し、認知する事態や心の働きも共有される部分と、認知する事態などの共有されることが保証できない部分とが想定される。このことは、被視点があいまいであり、そのため視線の関係性が不確定となり、視線の1つが無効で、単独の視線のみが有効であることによって説明できる。

次の例では、テキストの複数の参加者の間で、異なった方向の視線が合成される様相を検討する。

- (9) [引用者注：勝、朝子夫婦と2人の子どもは、2年前に水難事故のあった伊豆半島南端近くの浜に立っている]
 I 波がもち上がる。崩れようとする。崩れる。その轟きは、夏の日光の苛烈な静寂と同じものである。それはほとんど音ではない。耳をつんざく沈黙とでも言うべきである。そして四人の足許には、波の抒情的な変身、波とは別のもの、波の軽やかな自嘲ともいうべき、名残の漣がよせては退いている。
 II 勝はかたわらの朝子を見た。
 III 朝子はじっと海を見ている。髪は海風になびき、強い太陽光線にひるんでいるけはいもない。目は潤みを帯びて、ほとんど凜々しく見える。口は頑なに結ばれている。その腕には小さな麦藁帽子をかぶった一歳の桃子を擁している。
 IV 勝はこういう妻の横顔を何度か見たことがあるように思った。あの事件があつて以来、妻は時々放心しているようなこんな表情をする。それは待っている表情である。何事かを待っている表情である。
 V 『お前は今、一体何を待っているのだい』
 VI 勝はそう気軽に訊こうと思った。しかしその言葉が口から出ない。その瞬間、訊かないでも妻が何を待っているのか、彼にはわかるような気がしたのである。
 VII 勝は悚然として、つないでいた克雄の手を強く握った。(三島由紀夫『真夏の死』新潮社: 196)

この例のIVまでは、野村(2000: 91ff)でとりあげ、(10)(11)の事項を述べた。

- (10) テキストにおける観察はつぎの(a)(b)に区分できる。
 a. 第一階の観察
 テキストにおいて観察される事態が、その内部に観察という事態をふくまない作動。
 b. 第二階の観察
 テキストにおいて観察される事態が、その内部に観察という事態をふくむときにもたらされる、観察の観察という作動。
 (11) テキストにおける観察者はつぎの(a)(b)の関係で決定される。その関係に応じて、観察者としての属性はコミュニケーションの参加者、テキストの参加者あるいは想定される語り手としてのコミュニケーションの参加者に割り当てられる。
 a. コミュニケーションの参加者と一致する／しない
 b. テキストの参加者と一致する／しない

(9)は、観察の観察に関する典型例を内在し、無人称の観察者、すなわち無人称の語り手³⁾が想定されるのであるが、この理解の方法は観察という行為を基準にしており、それが連鎖するありようを、観察行為の多重する様相としてとらえたのである。したがって、(10)(11)は、糸井の視座、すなわち観察者とその位置を認定するものの、視座と被視点との関係や方向としての視線を認定しうるものではなかった。視線の概念を導入することで、観察者と観察

者、および認知される主体や対象との関係を、より明晰に記述できるはずである。

段落Ⅰは、無人称の語り手による描写とみなしてよい。Ⅱ以下で、(9)に認められる「見る」の動作主は、勝と朝子である。視座としての勝の見る対象である被視点は、朝子またはその横顔である。視座としての朝子の被視点は海である。Ⅲの「見える」の経験者は、語り手である無人称の観察者か勝かが判然としない。

無人称の観察者を除外したとき、Ⅱ以下のテキストには、勝を視座とし朝子を被視点とする視線と、朝子を視座とし海を被視点とする視線との2つの視線が想定される。Ⅱ以下で、この関係と方向は変化しない。このとき、勝の視線が朝子のみに関係し、海を認知の外においたものとして理解されるのかどうか。勝の視線においてⅢの情報がすべて認知されているとすれば、朝子に関係する勝の視線を、海に関係する朝子の視線と合成することが可能になる。その結果、勝を視座とする合成された視線は、ⅥⅦにおいて、水難事故に関係する朝子の心の働きを理解する表現と自然に結びつく。ここにも、視線の合成を仮定することによる説明の有効性が認められよう。

以上のように、視座・視線・被視点を仮定するとき、部分テキストにおいて複数の視線が想定されるばあい、それらの視線は同一の方向で並列して関係を維持し、あるいは異なる方向でそれぞれが関係を維持しながら合成されることが明らかになった。

最後に、以上の関係が複合して認められる例をとりあげる。(12)は第二次世界大戦末期の沖縄本島におけるエピソード、(13)はテキストにあるようにその59年後のエピソードである。2人称小説に分類される(野村2014)。

(12) [引用者注：お前と上官の2人は、別の2人のいる病院と思われる家に避難している]

これだけの戦場にこの家がこうして無事であるのが合点のいかないことだが、しかし、二人が、いや四人がいるあいだ、とにかく安全だろうと信じる思いが、二人に通いあった。窓の外に眼をやった。その視界を砲弾が斜めに切って落ちるのを見たと思ったら、弾着の音が聞こえた。窓に守られている、という実感が湧いた。

雨がかなり小降りになって、東のほうに遠く夕焼けが見えた。あのあたりは雨が降ってないらしい。どこの村だろう。お前の村はまるで違う方角だが、そこからもいまあの夕焼けは見えるだろうか。そこにまだ人が居残っていればの話だが、ひょっとしてアメリカの兵隊がそこで見ているかもしれない。信じたくないことだが……。

(大城立裕「窓」『群像』2004年11月号：147)

(13) [引用者注：看護師から] 医者がうけとって注射器の先を白い天井に向けるのを見て、それがひとつの延命の薬だろうと、妻は思った。お前が窓にすぎるようにして頼れるのと同時であった。

雨が小止みになった。窓の外に向こうに夕焼けが見える。あの日にあの窓から夕焼けを見て、お前の村でも見えるだろうかと思いをはせた、あの夕焼けだ。それが、この五十九年間をへてまた現れたのか。この自分の肉体があるときは幾つもの危機を凌いできたというのに、いまここでこのように平和のなかで滅びようとしている。にもかかわらず、あの夕焼けがまだ見られるというのか。ただ、お前は知らないが、小川はすでに消えたのだ。妻が見なかったのも無理はなく、小川は戦後の耕地整理ですでに潰されたのだ。そのかわりの灌漑溝がコンクリートで別に造られたことを、お前は知らない。知らないうちに死んでいこうとする。砂糖黍畑も雨もあの日と同じように見られるけれども、それはもはやあの日のものではないのだ。それでもしかし、お前にはあの夕焼けがなつかしく、うれしい。

そのお前の意識を妻は知らずにひたすら思う。せめて気を失う前に、この夕焼けを見てほしかった、と。

(同：151)

このテキストで、(12)と(13)の視座のおかれている場所は近傍であることが前提とされている。これはテキストの冒頭近くで、お前による(14)の述懐によって明示される。

(14) あの一軒家——というより、一軒だけ砲爆撃をまぬかれたと見えた家が、まもなく世間並みに焼け失せたあと、何十年かたって、この病院が建てられた、というのか。(同：140)

2つの部分テキストに時間差のあることは、先の(5)(6)に類似する。引用部分には、共通する素材として窓と雨、夕焼けがある。視覚行為の対象は、窓をとおしての「雨」と「夕焼け」が共通し、(12)には「砲弾」がある。視線を含意する動詞類として「見る」「見える」および「眼をやる」があり、名詞に「視界」がある。共通する参加者は、2人称者のお前であり、それ以外は(12)と(13)で異なる。

さて、被視点としての夕焼けは、時間と場所に制約されうが、(13)には「あの日にあの窓から夕焼けを見て、お前の村でも見えるだろうかと思いをはせた、あの夕焼けだ。それが、この五十九年間をへてまた現れたのか」とあ

る。時間の経過については、夕焼けを差異化する機能があたえられていない。知覚される対象として、(13)ではお前の記憶に依存して指示される。59年前の視座と現在の視座に対して、同一の関係が想定される被視点として認知されている。

(12)で視座として機能するのはお前であり、他の3人が視座であることを保障する記述はない。この限り、ダイクシスの中心である視座は、(12)の世界の時間を t_1 、場所を窓際とすれば、〈お前, t_1 , 窓際〉となる。どこかの村の人やアメリカの兵隊は、視座として可能態であるが、お前の想像の対象にとどまる。この想像と信じたくないという願望とが、お前の視線の作用により生成される心の働きである。

(13)では、夕焼けを被視点とする視座となるのは、お前と妻である。(12)と区別して、時間を t_2 、場所を窓際とすれば、ダイクシスの中心は、〈お前 \wedge 妻, t_2 , 窓際〉であり、これが視座である。しかし、この2人の視線は著しく異なる。お前の視線は、記憶に依存して現在の夕焼けと59年前の「あの夕焼け」とを関係づける。このことによって、部分テキスト(12)で仮定される視線と(13)で仮定されるお前に帰属する視線とは、合成される。それゆえ、なつかしく、うれしいという感情が、その視線の関係において生成されるのである。

これに対して、妻の視線は、59年前の夕焼けには関係をもたず、(13)の現実世界における現在 t_2 にのみ関係する。お前と妻の視線は並列しているが、妻の視線が合成される対象は認められない。このことから、その視線の関係に依存する感情は「せめて気を失う前に、この夕焼けを見てほしかった」という願望だけである。お前と妻にかかわる「あの夕焼け」と「この夕焼け」の使い分けについても、視線の合成の有無によって説明できる。

以上、テキストの参加者の数と観察の概念を媒介にして、視線の方向や関係のありようを記述した。

4 整理

本稿で、事例により明らかにしたことを整理しておく。

- (a) 視座、視線、被視点を仮定することにより、物語テキストの表現と理解のしくみを、テキストの参加者のたちから説明できる。
- (b) 関係性と方向性が視線を構成し、視座と被視点は〈主体または対象、時間、場所〉を参照点として記述できる。
- (c) 視線を仮定することで、観察の概念を明晰に規定できる。
- (d) 視線について距離を想定することができる。
- (e) 視線が自己言及的に機能することがある。
- (f) 複数の視線が並列し、または合成されることがある。
- (g) 視線における心の働きを表現する語句の意味は、『分類語彙表－増補改訂版』の「人間活動－精神および行為－心(.30)」に分類される範疇に整合する。

本稿では、議論を簡単にするために、視覚的な表現だけを取りあげてきた。しかし、テキストの参加者、あるいはコミュニケーションの参加者と種々の対象における関係と方向を理解するためには、視覚以外の多様な認知、認識も視野に入れる必要がある。このことにより、関係と方向に、より複雑なありようを取りだすことができるはずである。その前途を認めつつ、稿をとじる。

【注】

- 1) この例以下、本稿でとりあげる物語テキストでは、実在の地名が用いられており、時間的な情報も明示されているか、または、推定できる手がかりがあたえられている。引用においては、必要に応じ、文番号として丸数字、形式段落番号としてローマ数字を付した。
- 2) 用例(3)では、「見る(1.3091)」、「見る(2.3091)」に分類される語句に実線、これを除く「人間活動－精神および行為－心(.30)」に分類される語句に波線を付した。また、論述において着目を要する部分に破線を付した。以下、同様とする。
- 3) 用語「無人称の語り手」は、亀井秀雄1983による。

【参考文献】

石出靖雄 2016『漱石テキストを対象とした語り言語の研究－『三四郎』『道草』を中心に－』明治書院

- 石綿敏雄 1999 『現代言語理論と格』 ひつじ書房
- 糸井通浩 2009 「表現の視点・主体」 糸井通浩・半澤幹一編 『日本語表現学を学ぶ人のために』 世界思想社
- 糸井通浩 2014 「視点論の課題」 『表現研究』 100.
- 榎本美香・伝康晴 2011 「話し手の視線の向け先は次話者になるか」 『社会言語科学』 14(1).
- 大江三郎 1975 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』 南雲堂
- 亀井秀雄 1983 『感性の変革』 講談社
- 久野暉 1978 『談話の文法』 大修館書店
- 古賀悠太郎 2018 『現代日本語の視点の研究』 ひつじ書房
- 国立国語研究所 2004 『分類語彙表 増補改訂版』 大日本図書
- 西郷甲矢人 2017 「「同じさ」の措定：圏論的観点から」 『日本認知科学会第34回大会発表論文集』 日本認知科学会
- 佐伯胖 1978 『イメージ化による知識と学習』 東洋館出版
- 清水義夫 2007 『圏論による論理学 高階論理とトポス』 東京大学出版会
- 田窪行則編 1997 『視点と言語行動』 くろしお出版
- 往住彰文 1991 『心の計算理論』 東京大学出版会
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』 ひつじ書房
- 野村眞木夫 2014 『スタイルとしての人称—現代小説の人称空間—』 おうふう
- 野村眞木夫 2018 「物語における視線とマイクロ・マクロ・リンカー「語り論」の新展開—」 『表現研究』 108.
- 福沢将樹 2015 『ナラトロジーの言語学—表現主体の多層性—』 ひつじ書房
- 松木正恵 1992 「「見ること」と文法研究」 『日本語学』 11(9).
- 松木正恵 1993 「文末表現と視点」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 5.
- 茂呂雄二 1985 「児童の作文と視点」 『日本語学』 4(12).
- Dancygier, B. 2012 *The Language of Stories: A Cognitive Approach*. Cambridge University Press.
- Dancygier, B. and E. Sweetser eds. 2012 *Viewpoint in Language: A Multimodal Perspective*. Cambridge University Press.
- Fludernik, M. 2006/2009 *An Introduction to Narratology* (tr. by H-Greenfield, P. and M. Fludernik). Routledge.
- Fludernik, M. 2010 Mediacy, Mediation, and Focalization : The Squaring of Terminological Circles. in Alber, J. and M. Fludernik eds. *Postclassical Narratology: Approaches and Analyses*. The Ohio State University Press.
- Friedman, N. 1955 Point of View in Fiction: The Development of a Critical Concept. *Publications of the Modern Language Association of America*. 70 (5).
- Löbner, S. 1976 *Einführung in die Montague-Grammatik*. Scriptor Verlag.
- Nünning, A. 2001 On the Perspective Structure of Narrative Texts. in Peer, W. van and S. Chatman eds. *New Perspectives on Narrative Perspective*. State University of New York Press.
- Ryan, M-L. 1991 *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative Theory*. Indiana University Press.

【付記】

野村(2018)と本稿の内容を考察するにあたり、圏論(Category Theory)の考え方を参照した(清水義夫2007など)。基礎的な段階での圏の定義は、視座・視線・被視点の関係と類比的に対応する。視座と被視点をobject, 視線をarrow (morphism)に対応させるのである。本稿では、各事例について一切の図式化を割愛したが、それは圏論での種々の図を都合よく用いることができるがゆえに、過度の親和性を主張しないためである。圏論が言語表現の理解や言語表現の認知に応用可能であるかについて、安易な適用を試みることには、慎重であることが望ましい(cf. 西郷甲矢人2017)。ただし、そのような方向への議論の展開には、有用性が認められよう。以上、付記する。

Esprimo de Vidlinio en Japana Rakonta Teksto

Makio NOMURA*

RESUMO

En ĉi tiu studo, la koncepto de vidlinio estas hipotezita. Ĉi tie, la koncepto de vidlinio estas uzata por klarigi la mekanismon de esprimo kaj kompreno de japanaj rakontaj tekstoj (fikcioj) laŭ la starpunkto de partoprenantoj de la tekstoj. En la procezo, la jenaj faktoj estas klarigita: (1) vidlinio estas kunmetata de rilato kaj direkto, (2) ĝi estas supozata kiel distanca koncepto, (3) ĝi povas funkcii mem-reference, (4) ĝi povas funkcii paralele aŭ kunlige, (5) ĝi generas la mensan funkcion de partoprenanto.

* Humanities and Social Studies Education